

英語科学習指導案

Nagata Junior High School

Date: Friday, September 20th (2nd period)

Instructor: Daiichiro Yamasaki (JTE 1)

Tatsumichi Kobayashi (JTE 2)

1 Text: NEW HORIZON ENGLISH COURSE 3, Unit 4 "An American *Rakugo-ka*"

2 Lesson Survey (単元の題材観・指導観)

本課は、1980年代から注目を受け始めた英語での落語を通して、日米の文化・ことばの使用法の違いを扱っている。落語は江戸時代に日本で始まった話芸である。1980年代に故桂枝雀氏が趣味の英会話を生かした英語落語に発展させ、アメリカ人のビル・クラウリー氏とともに日本国内や各国を公演してまわった。それぞれの文化特有の習慣や考え方があるが、「英語落語」は落語の「笑い」を通して、その垣根が取り払えるものと考えられている。本課の内容は、せんすの使い方、英語落語を聞きに行こうという対話、英語落語で取り上げられたアメリカ人と日本人の異文化体験談から構成されている。言語材料としては、疑問詞＋不定詞（言語の働きは「紹介する」）、It is ... for to ～（言語の働きは「質問する」「答える」）が扱われている。

本年度から完全実施の学習指導要領のもと、評価において教師は、生徒一人ひとりの学習状況を把握し、説明責任を果たす必要がある。さらに指導に生かすため、目標準拠評価（絶対評価）や個人内評価の重要性が示され、これまでより一層「指導と評価の一体化」を進めていく必要がある。これらを重視することにより、生徒たちのつまづきを理解し、改善に向けて指導することができ、また一人ひとりの良さを伸ばせるものとする。本校英語科では、今年度からJTE同士のチームティーチングをスタートさせた。さらに今後は少人数指導も取り入れるように研究を進めている。これらのことにより、生徒一人ひとりの学習状況に応えられる指導法改善・評価の工夫ができるものと考えている。

本課においては、「聞くこと」「話すこと」に重点を置き、タスクとして「日本と外国の生活習慣の違いを理解し、英語で説明しよう。」を設定した。落語を通して自国の文化に関心を持ち、落語で語られる異文化体験談を通して自国と他国の違いを認識し、違いについて知ったことをお互いに発表しあえるようにする。まず、第1時でタスク設定をし、第4時まで言語の働きや使用場面を意識しながら、基礎的・基本的内容の定着を図る。第5時で自分の設定したテーマで、文化の違いについて説明する文章を完成させて発表する。

このような指導を通して、生徒にタスク追究の過程で、基礎的・基本的な内容を身につけさせ、異文化間の違いに気付かせ、そのことについて友達や教師に「英語で説明できた」という有能感や自己肯定感を味わわせたい。

3 単元の目標

- ・「疑問詞＋不定詞」や It is ... for - to ～の新出表現を理解し、それらを用いて表現できるようにする。
- ・日本と外国の文化やことばの用法の違いを理解し、英語で説明できるようにする。

4 「指導と評価の一体化」の工夫

元来、学校教育は、Plan（計画）－ Do（実践）－ See（評価）の一連の活動を繰り返しながら展開されている。教科指導においても、評価をもとに、生徒のよりよい成長を目指し、指導していかなければならない。その中でも目標準拠評価（絶対評価）を重視することは、生徒が基礎的・基本的を確実に把握し、教師や生徒自らが設定した目標を実現しているかを知るために重要である。評価の方法や評価情報の活用の工夫をすることは、教師側においては指導計画や指導方法等の振り返りになり、生徒側においては自らの学習状況に気付き、自分を見つめ直し、その後の学習を促すことになる。

具体的な評価方法については、ペーパーテストやワークシート、観察、パフォーマンステスト等を取り入れて、記録を補助簿にとり、効率的かつ多角的に生徒の達成状況を把握できるように努めたい。

5 Lesson Plan（指導計画・評価計画） → 別紙参照

6 Aims of This Period（本時の目標）

(1) 指導の重点

「聞くこと」「話すこと」

(2) 本時の目標行動

It is ... for - to ～の新出表現が理解でき、週末の予定（英語落語を聞く）についての本文の内容を理解し、重要表現を用いて対話を行うことができる。

(3) 本時の指導目標

- 1 既習表現や新出表現を通した対話活動を進んで行うことができるようにする。
- 2 新出表現（It is ... for - to ～）を適切に用いて、表現することができるようにする。
- 3 教師の口頭導入や本文の対話を聞いて、その内容を理解できるようにする。
- 4 新出表現（It is ... for - to ～）の用法を理解し、英語落語について関心をもち、日本の文化に対して理解を深められるようにする。

(4) 本時の実際（2／6）

区 分	主な学習の流れ	教 師 の 活 動 (JTE 1)	教 師 の 活 動 (JTE 2)	○指導の留意点 ●評価 □補説 (評価規準表との関連)
--------	---------	------------------------	------------------------	-----------------------------------

導 入 (15) Up	<pre> graph TD START([START]) --> Greeting[Greeting & Singing 1] Greeting --> WarmUp{Warm up 2} WarmUp -- Yes --> Aims[Aims of this period 3] WarmUp -- No --> Aux[Auxiliary 2] Aux --> WarmUp </pre>	・ 英語で挨拶し，英語の歌を歌う。 ・ ゲームを通して，前時の重要文を用いて対話させる。	・ 英語で挨拶し，英語の歌を歌う。 ・ ゲームを通して，前時の重要文を用いて対話させる。	○英語学習の雰囲気づくりに努める。 ●既習表現（疑問詞＋不定詞）を用いて，友達と対話できたか。 □理解不十分な表現を全体で確認する。 （Ⅱのア）
展 開	Aims of this period 3 Introduction of new expression 4 Practice of expression 5 ①	・ 学習目標を提示する。 重要表現を用いて対話したり，日本文化についてまとめたりしよう。 ・ 対話をして，新出表現を導入する。 ・ 板書する。 ・ 生徒の理解度に応じて，添削したり机間指導したりする。	・ 学習目標を提示する。 重要表現を用いて対話したり，日本文化についてまとめたりしよう。 ・ 対話をして，新出表現を導入する。 ・ 重要事項を説明する。 ・ 生徒の理解度に応じて，添削したり机間指導したりする。	○生徒と会話をしながら，生徒の学習意欲を高めるようにする。 ○場面設定をして，視覚的に導入することにより，生徒の理解を助けるようにする。 ●新出表現を理解しているか。 □個別に指導する。 （Ⅱのイ）

	①			
--	---	--	--	--

	②			
終 末 (3')	② <pre>graph TD; A[②] --> B[Consolidation 13]; B --> C[Assignments 14]; C --> D([End]);</pre>	・ 本時の学習内容をまとめ。 ・ 宅習事項を確認させ、次時の予告をする。 ・ 英語で挨拶する。	・ 本時の学習内容をまとめ。 ・ 宅習事項を確認させ、次時の予告をする。 ・ 英語で挨拶する。	○自己評価表を記入させる。 ○具体的に提示し、メモさせる。

(5) 評価

It is ... for - to ~ の新出表現が理解でき，週末の予定についての本文の内容を理解し，重要表現を用いて対話することができたか。

7 成果と課題

(1) 成果

- ・ 本校3年生はこの单元まで，JTE 同士の Team - Teaching で授業に臨んだが（その後は少人数指導に変更），学習活動の項目に沿って，タイミングよく，それぞれの指導観・指導力を生かした授業になった。
- ・ 今回の研究・授業実践を通して，单元全体を見通した指導や評価に努めたため，教師側が身につけてほしいことを，生徒側もよく理解して活動し，教師側も生徒の学習状況を確認しながら指導することができた。あらためて单元ごとや年間の指導計画・評価計画の重要性を確認することができた。
- ・ 評価規準を設定し，言語の知識・理解を深め，表現の能力や理解の能力を高める指導に心がけたため，生徒たちは段階をふんだ学習ができた。
- ・ 評価方法（観察法，生徒の応答，ワークシート）を工夫したことにより，教師側は生徒たちがどこまで理解することができたか，表現することができたか，達成度を把握しながら指導することができた。
- ・ ワークシートの工夫により，評価規準（到達基準のB）を満たす力をつけた生徒たちは，さ

らに進んだ学習に取り組んでいた。

- ・ 自己評価表を作成し、単元の各時間ごとに項目を示し、生徒に評価させたため、それにより、生徒が自分の学習状況を確認しただけでなく、評価項目にしたがって教師側の指導の再確認もすることができた。

(2) 課題

- ・ 生徒たちは個人の活動やペアの活動は進んで取り組んでいて、発話も多かったが、声が小さかったり、進んで発表することが少なかったりして、それぞれの学年の発達段階に応じて、または毎回の授業において、学習訓練の積み重ねの重要性を感じた。(指導面)
- ・ 一単位時間の学習活動を多く設定したため、理解の遅い生徒の中には、理解不足のために、重要表現を用いた対話活動に十分取り組めない生徒がいた。
- ・ Team・Teaching の授業形態だったが、評価に対しての協力体制が十分とれていなかった。
- ・ 4つの評価項目を一単位時間ごとに立て、補助簿を用いて評価しようと努めたが、1単位時間の中で全て評価しようとしたため、評価できた生徒と、十分できなかった生徒がいた。指導の重点とともに、各単位時間の評価の重点を決めて臨まなければならない。
- ・ 一単位時間の中で、特に評価する場面を設定していたが、評価規準に達していない生徒に対する具体的な手だてを工夫していなかったため、また全体の通過率を把握しなかったため、机間巡視の中でその場だけの指導になってしまい、指導と評価の一体化を十分に図れなかった。

この数ヶ月の継続研究により、評価規準について理解を深め、実際の授業に生かせるようになってきた。教師は教科の中で、生徒に何を身につけさせたいか、そのためにどう指導するか、そして学習状況はどうなのか、中学3年間、年間、学期間、単元と、それぞれもつことの重要性を感じた研究だった。以上の課題の解決とともに、他の単元や学年の評価計画の設定、学期末評価や学年末評価との関連の研究も行っていきたい。